

新企画授業構想：「動物による心の健康教育を実践する学生参画型教育」

田谷一善・渡辺元・岩崎利郎（農学部獣医学科）

A new plan of a student class: A practical education for human mental health by the animal assisted education

Kazuyoshi TAYA, Gen WATANABE, Toshiroh IWASAKI

(Division of Animal Life Science, Institute of Symbiotic Science and Technology, Tokyo University of Agriculture and Technology)

This paper describes a new plan of a student class using animals. It is composed of the following 4 courses. 1) The animal assisted education courses (AAE course), 2) The dog training course (dog training course), 3) The animal assisted activity course (AAA course) and 4) The horse therapy course (horse therapy course). The course design of the class is based on the tutorial system under the supervision of each academic staff using facilities of our university. Students will study and investigate their subjects after the original course and the weekend. Students will learn a lot of new knowledge through discussion of many peoples, who are not limited to university, including outside peoples. This new student class will be developed as a practical education in our university in future.

[キーワード：新企画授業，心の健康教育，動物介在教育，動物介在活動，ホースセラピー]

1 はじめに

東京農工大学農学部獣医学科は、これまでに地域の小学校や住民から寄せられた要望に応える形で、動物を用いたさまざまなプロジェクトを展開し、子どもの情操教育や高齢者のQOL（Quality of life）の向上を目指して地域社会に貢献してきた。これら、教員と有志学生のボランティア活動として進めてきたものをさらに発展させ、正式な授業とするべく立案したものがこの新企画授業構想である。

この授業の大きな特徴は、学生が単に参加して活動するのではなく、計画の立案から授業に加わる「学生参画型」であり、学生の創意工夫によって大学を地域社会に結びつけ、現実に即したコミュニケーション能力と問題解決能力を主体的に学ぶことにある。

子どもの心の健康教育や高齢化社会における動物の存在が注目されている今、「大学」「学生」「地域社会」の三者が一体となって活動する新しい形の授業として、東京農工大学の特色ある教育に発展させることを目指している。

2 新企画授業立案の背景と目的

今、日本では、子どもたちを取り巻く問題が深刻化し

ている。切れる子ども、いじめ、学校崩壊、残虐化する動物虐待と少年凶悪犯罪など、どれを取っても真の命の大切さを学んでいないことに問題がある（中川美穂子, 2001; 山崎恵子, 2001）。動物の存在は、心豊かな子供を育てる情操教育「心の健康教育」として大いに役立つことが古くから知られている（桜井富士朗・長田久雄, 2003; 日本動物病院福祉協会, 1996; 林良博, 1999; 山崎恵子, 1997; 横山章光, 1996）。動物の飼育や動物とのふれあいを介して、動物が教えてくれる大切なこと、他人へのいたわり、思いやりを通して命の大切さを学ぶことがさまざまな面から見直されている（竹内一男, 1999; 鳩貝太郎・中川美穂子, 2003）。このような子どもの情操教育に及ぼす動物の効果は、動物介在教育^{注①}と呼ばれ、近年その効果に対して科学的根拠が解明されるようになった（谷田創・木場有紀, 2006; 鳩貝太郎, 2006; 早坂絵里他, 2000; 廣瀬由美・増澤康男, 2005; ヤスミンデブー・加隈良枝, 2006; 横山章光, 2006）。また、日本では超高齢化社会の到来も間近に迫り、「健康で心豊かに年を取る」ことへの関心が高まっている。シルバー世代と動物の関係も近年関心が高まり、高齢化社会における動物の存在が注目されている（柴内裕子, 1999; 中川亜耶人他, 2001; 日本動物病院福祉協会, 1996）。

人間は、動物に触れると心が安らぐことは多くの人が経験することである。このような動物と人との自然な関係を利用して人の健康維持に役立てようとする試みが日

本でも盛んに行われるようになった。このような動物を人の心の健康や身体的治療に用いる行為は一般にアニマルセラピーと呼ばれる。日本では、アニマルセラピーといえ、犬や猫を用いた活動を思い浮かべる人が多いが、馬を用いたセラピー（ホースセラピー^{注(2)}）は、教育、レクリエーション、医療と3つの効果を含む最適な活動といえる（明見健治, 1997; 川喜田健司他, 2001; 慶野宏臣他, 2001; 慶野裕美他, 2002; 柴崎宏司, 1999; 田谷与一, 2001; 局博一, 2001; 2005）。ホースセラピーの歴史は古く、古代ギリシア時代に戦場で負傷した兵士の身体機能回復のために乗馬が用いられていた。ホースセラピーは、馬に乗ることばかりでなく、馬とのふれあいによる精神的効果も大きく、小型のミニチュアホースによるふれあい効果も知られるようになった（西村脩一, 1996; 松上利男, 1996）。このように、これまでは、科学的に証明しづらかった動物による人の健康に対する効果が、最近の新しい医療機器の応用により日本でも少しずつ研究が進んでいる（小林朋子他, 2002; 高野正博, 2003; 松井寛二他, 2004; 松浦晶央他, 2004; 山崎恵子, 1998; 2001; 横山章光, 2000）。本学獣医学科では、長年にわたって、動物を用いて子どもの情操教育や高齢者のQOLの向上を目指して活動を続けてきた。

今回の新企画授業の最も大きな特徴は、「学生参加型」ではなく、「学生参画型」とした点にある。学生は、これらの授業に単に参加して活動するだけでなく、計画の立案から授業に加わり、学生の創意工夫によって大学と地域社会を結びつけ、自ら実社会へ身を置き大学の枠組みを超えて地域社会で現実に即した実践教育を主体的に学ぶことにある。これらの実践教育を通して、本学の目指す「課題探求能力に富んだ使命指向型の人材」が育っていくことを期待している。

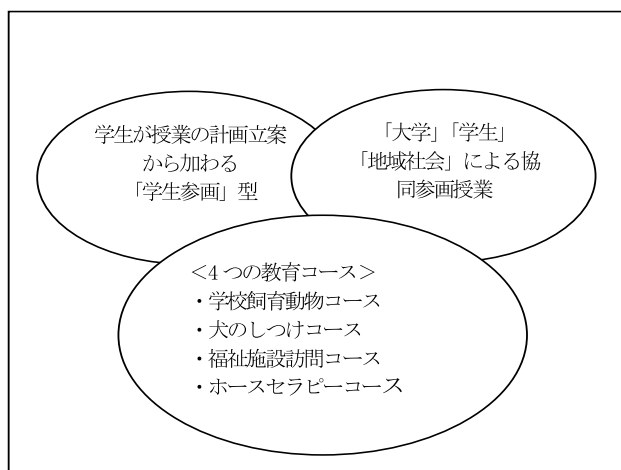


図1. 新企画授業のイメージ

3 新企画授業の内容と実施方法

今回企画した授業は、次の4つの教育コースからなる(図1)。

3.1. 学校飼育動物コース

シバヤギ、ハムスターやウサギの飼育を通して、子どもの心の発育を支援するコースで、主に小学校と小学生が対象である。

3.2. 犬のしつけコース

犬のしつけを通して、地域住民に動物と共に暮らす生活のマナーを教える。

3.3. 福祉施設訪問コース

犬や猫などの小動物を伴って高齢者施設を訪問し、高齢者の心のケアを支援する。

3.4. ホースセラピーコース

本学馬術部の乗馬やアメリカンミニチュアホースを用いて、子どもや身障者の心のケアを支援する。

いずれのコースも、本学獣医学科でこれまで蓄積してきた知識と経験を基に、主に本学の既存の施設を活用して行うものである。

4 期待される成果

- ① 学生が動物介在教育や動物介在活动^{注(3)}を通じた主体的学習により地域社会で、様々な人々と接し、現代社会の抱える「心の健康教育」の必要性と、それを支える動物の重要性を学ぶ。
- ② 学生は、大学教育の中で学習してきた専門知識を、大学の枠組みを超えて地域社会で現実に即した実践教育を行うことにより、自分が現場に身を置き、現実の問題について知識、技術、情報、資源等を活用して、どのように解決するかについて主体的に学ぶ。
- ③ 学生は、学年を超えた数名からなるチームを作り、それぞれの授業に参加することから、問題解決のために必要で創造的な実践力、参加者間の連携力及び様々な立場の人々とのコミュニケーション能力などを身につけ、大学の中では体験する事の出来ない多種多様な場面で本来の実力を発揮できるバランスの取れた人材へと育成する。

本授業は、本学学生の教育が主目的であるが、大学、地域と学生の三者が一体となって取り組む内容であり、本学の地域社会への貢献事業の一つにもなると期待される。

5 新企画授業の実施形式

いずれのコースとも、学生が授業立案から参画する「学生参画型」であることから、授業形式は、チュート

リアル形式とし、担当教員が適切なアドバイスを与えることにより、学生はお互いの学習と論議を繰り返し、学内外の関係者とも交渉を重ねながら授業を進める。それぞれの教育コースで動物を使用するので、経験の少ない低学年の学生だけでは授業の実施が困難であることから、授業に参加する学生は、1年生から6年生までと幅を持たせる。これによって、通常大学の講義や実習では交流の少ない学生の縦の関係が築かれ、授業の展開におけるそれぞれの学生の役割分担などについて十分に論議し、責任を果たすことによって社会生活の基礎を学ぶ。また、学内外で学習したり、活動する場合に月曜日から金曜日までの正規の授業時間で行うことは困難であり、授業終了後の時間や土曜日、日曜日あるいは祝祭日を利用するなど工夫が必要である。いわゆるグループゼミ形式の課外実習授業に担当する。本授業は、当面半期選択制の実習単位として1単位を与えるのが適当であろうと考えている。それぞれのコースを受講した学生は、自身の授業を終了した後もティーチングアシスタントなどさまざまな形で本授業のサポートを行う。また、本授業を進めるに当たっては、獣医学科の実習犬の活用や馬術部の繋留馬の使用が必須であることから、獣医学科の関連する研究室、犬のしつけグループおよび馬術部やミニホースの会などの協力が必要である。

6 新企画授業の実施に向けての改善

当初提案した新企画授業は、これまで本学獣医学科が蓄積してきた活動を基にして、前述した4つの教育コースを構想した内容であった。しかし、新企画授業を正規の授業として本学において開講するに当たっては、獣医学科学生だけでなく、農学部の他の学科や工学部の学生も受講可能な内容が望ましい。今回提案した授業内容には、専門性から考えても獣医学科の学生である必要はないことから、授業の実施体制さえ整えば、全学に開放できる内容であると考えられる。本授業の企画をさらに詰めて検討する中で、前述の4つの教育コースに加えて、第5番目の教育コースとして「昆虫教育コース」を加えることを計画している。本授業が、正式に本学に定着した場合には、それぞれの学科の特徴を生かしたさまざまな教育コースの開講が可能である。

7 本学獣医学科におけるこれまでの活動実績

今回の新企画授業提案の基礎となったこれまでの活動内容について、4つの教育コースごとに記述する。

7.1. 学校飼育動物コース

小学校では、平成4年度から1・2年の理科・社会を統合した教科として「生活科」がスタートした。3年生か

ら始まる「総合的な学習の時間」いわゆる「総合学習」の先駆けであった。平成15年度からは、学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間が導入された。このようなカリキュラムの変更に伴って多くの幼稚園や小学校では、小鳥やウサギ、ニワトリ、ハムスターなどの動物を飼育して、子どもの情操教育や理科教育に活用している。特に小学1、2年生に生活科という科目が設けられてからは、その教科書にニワトリとウサギが取り上げられたこともあり、これら2種の動物が小学校で飼育されている例が多い。ニワトリの中でもチャボは小型で穏和な性格であり、管理もしやすいが、大型になるブロイラー種の雄などは突かれたりけられるなどの問題が生じた。またウサギについては、ウサギの繁殖機能に対する理解不足と本来薄暮行動性のアナウサギであるということから、子どもによる管理が行き届かないため増えすぎの問題が生じてきた。

多くの小学校では生活科や理科、総合学習、あるいは情操教育のために、ウサギやニワトリ、ハムスターなどを飼育している。しかし担当する教諭はそれらの動物をどのように飼育すべきか、それぞれの動物がどのような特徴を持っているのかなど、疑問や不安を持ちながら学校で飼育しているのが現状である。そのような疑問や不安を軽くして、適切に動物を飼育して活用することにより、動物の飼育環境の改善や子どもたちの動物に対する正しい理解が期待される。このような背景のもと本学同窓会獣医学部会では、平成10年7月にシンポジウム「学校飼育動物の現状と課題」を開催して教育現場における動物の活用について問題点の抽出を行った。平成15年には日本獣医師会が小動物開業獣医師を中心として、専門委員会のひとつに「学校飼育動物委員会」を加えた。

本学の府中キャンパスは、設立当初は農村地帯であり、獣医学科の学生にとって産業家畜に関する実地訓練を行う場所は身近にあったが、近年は都心に近い住宅地と変貌している。家畜病院に来院する主要な動物も伴侶動物と呼ばれる犬や猫がほとんどとなり、獣医学科の学生が大型動物の飼育や臨床を体験する場は限られることとなった。現在、獣医学科の2、3年生は学内で飼育され実習で使用する犬や牛の飼養管理を行うとともに、5年生で千葉県共済連合会の診療所における短期の実習、6年生で農学部付家畜病院における総合臨床実習などを行う他は、個々の学生が夏休みなどの長期休暇に行う学外実習が数少ない実地訓練の場となっている。近隣の小学校で飼育されている動物は、低学年の獣医学科学生にとって、動物とその飼い主とのコミュニケーションの大切さを学ぶ臨床導入学習の場として、極めて有用であると考えられる。

以上のような考えから、学校飼育動物に対する援助を

獣医学科学生とともに、主として府中キャンパス近隣の小学校を対象に行っている。また、獣医臨床繁殖学研究室が中心となって立川市立第八小学校におけるシバヤギの飼育指導、授業への協力も行っている。小学校を訪問する時間が大学の授業時間と重なることが多いため参加する学生は固定しておらず、その都度参加者を募集しているが、参加している学生は研究室に所属している5、6年生や、授業時間割に余裕のある1、2年生が主体となっている。獣医学科の学生にとっては、小学校という動物飼育の現場を見て、飼い主である子どもや先生とコミュニケーションを取りながら、どのようにアドバイスをすべきかを体験しながら学ぶ良い機会となっている。平成17年には、府中での実績を聞いて多摩市立第一小学校からも依頼があり、学校で飼育しているウサギを用いるとともに山羊やアメリカンミニチュアホースのアップルサイダー号を伴って小学校を訪問して動物ふれあい教室を実施した。

さらに、学生のボランティアとともに、毎年府中キャンパスで飼育されている動物を用いて、FSセンター、馬術部、ミニホースの会、生物生産学科と獣医学科で協力し、小学生の見学と体験学習を多数受け入れている。子どもたちが、家畜とのふれ合いを通じて動物に対する理解を深め、同時に「命の大切さ」と私たちが食べている「食物は命あるものからできたもの」であることを考える機会となることを目的に継続して行っている。平成5年からこれまでに本学獣医学科が直接指導にあたった小学校は、10校以上に及ぶ。

7.2. 犬のしつけコース

犬のしつけコースは、「犬のしつけサークル」が中心となって活動を進めてきた。犬のしつけサークルは、獣医内科学教授岩崎利郎の指導で平成11年に発足した学生のサークルである。活動内容は、2つに分けられる。第一の活動は、犬のしつけについての知識や技術の習得、犬のしつけの基礎となる学習心理学や動物行動学を学びプロのトレーナーから具体的な犬のトレーニング法を学ぶ。第二の活動は、地域で犬を飼育している飼い主に対しての啓蒙活動である。地域の犬の飼い主に対して、ボランティアでしつけの指導を行い、第一の活動で学んだ知識や技術を社会還元する試みである。具体的には、犬のしつけサークルが市民向けの「しつけ教室（ワンワン学院）」を開催したり、小学生を対象にした「犬のふれあい教室」を開催して子どもに犬とのふれあい方の基本を指導する。また、問題行動を抱える飼い主の相談を受けたり、訪問指導も随時行ってきた。

7.3. 福祉施設訪問コース

福祉施設訪問コースは、授業では体験する機会の少ない福祉の現場に実際に赴き、福祉活動を通して自分達ができることを学ぶこと、並びに、動物介在活動を通して動物の効果・可能性を知ることが目的としている。この活動は、獣医内科学教授岩崎利郎の指導で平成11年から獣医学科学生有志がCAPP活動^{註(4)}の一環として行っている。現在では、東京都の老人福祉施設多摩大和園さくら苑（2ヶ月に1回第2月曜日）とやまと苑（1ヶ月に1回第4日曜日）の活動に参加している。

活動内容は、30分ほどコンパニオンアニマルと共に入所者とふれあうことである。いつもは、他人とコミュニケーションをとることが難しい人でも、動物をひざに乗せるとその重みや暖かさを感じ、動物をなでたり、名前を呼んだり犬に向かってボールを投げたりする人もいる。これら全ての行動は、リハビリや人とのコミュニケーションにつながる内容であるが、動物介在療法^{註(5)}とは異なり、医療効果を目的とした活動ではないので、医師の介入は必要なく誰でも参加できることが利点である。

7.4. ホースセラピーコース

ホースセラピーコースは、馬術部の乗馬とアメリカンミニチュアホース「アップルサイダー号」（1991年米国生まれの雄、アメリカミニチュアホース協会正式登録馬で馬車を引く調教を受けている）を用いて活動している。アップルサイダー号は、本学獣医学科昭和24年卒で世界的な遺伝学者であった大野乾博士（本学名誉博士第1号）が米国で飼育していたが、本学に平成15年3月に寄贈された馬である。本学では、子どもや障害者とのふれあい活動などの社会活動に活用されている。このコースでは、人と馬のふれあいを通じた社会活動を目的とし、子どもや身障者への心のケアを助けるプログラムを実施している。また、地域のイベントや馬の教室などで、子どもたちに乗馬の楽しみや動物愛護の精神を学んでもらう活動も行っている。

これまで、府中市との協同参画事業として夏休みに行う「馬の教室」、地域社会のイベント参加、中学校の生活科の授業、地域の子どもたちや障害者の方々とふれあいなども行っている。また、アップルサイダー号は、日野市スプリングフェスタへの参加、八王子東養護学校への訪問、府中の森公園でのイベント、味の素スタジアムで開催されたジャパンラグビートップリーグでの試合球運びや、全日本学生馬術大会開会式プレゼンター（日本中央競馬会馬事公苑）などで活動をしている。

これからは、2004年に完成した本学の馬術施設を活用して、障害者乗馬なども活動の内容に加えて学外の方々と交流をさらに深めたいと計画している。これまでの

活動の様子が読売新聞(平成17年10月27日)に紹介された。

8 教育改善支援プログラム採択後に実施した活動

獣医学科では、これまでの活動実績を基にして平成17年に学内で公募された「教育改善支援プログラム」に応募し採択された。以下にそれぞれの活動の記録を記述した。

8.1. 「学校飼育動物」コースの取り組み

- (1) 獣医生理学助教授渡辺元は、平成18年度基礎ゼミで動物介在教育を取り上げ、ゼミに参加した学生とともに本企画の導入を行った。主な対象は府中市内の小学生で、先生を通じて学年単位で行ったが、ボーイスカウトなどの団体も受け入れた。平成18年度は、5月に新町小学校の4年生、7月に第九小学校ふたば学級、11月にボースカウト町田13団と府中1団のカブスカウトおよび第九小学校1年生の見学を受け入れた。これらの活動には、基礎ゼミ参加者以外にも動物介在教育に興味のある学生たちがボランティアで参加し、子どもたちに動物の身体の仕組みについて解説したり、山羊や馬に餌をあげたり、牛や羊にさわったり心音を聞いたり、様々な体験をした。活動の一部を写真で示した(図2,3)。
- (2) 府中市立新町小学校では、本学獣医学科から貸与する形で山羊を継続飼育しており、敷地の一部にある雑木林を父兄の協力で放牧場に行っている。平成17年には、出産と育子も体験した。府中市立第九小学校では、

クラスペットとしてハムスターを飼育させ、出産育子を観察させた。

- (3) これらの活動に参加した獣医学科と地域生態システム学科の学生が中心となり、平成18年に動物介在教育を進めるサークル「AAE-TUAT」が誕生し、府中市の福祉祭りや本学学園祭で動物とのふれ合い教室を実施した。

8.2. 「犬のしつけ」・「福祉施設訪問」コースの取組

- (1) 小学生対象「犬とのふれあい教室」の開催
農工祭で小学生に犬との接し方を通して社会生活のマナーを指導した。当日の様子と学生の活動が、アサヒタウンズ第1662号(平成18年1月5日発行)に掲載された。
- (2) ラジオでの犬のしつけ指導
犬のしつけサークルの代表者が平成18年1月にFM多摩放送に出演し、犬のしつけと社会生活について指導した。
- (3) 家庭犬トレーニングインストラクター講座の開催
家庭犬インストラクター鳴海治氏を招待して、講義と実習を受講した。実習では、府中市広報により募集した40組の飼い主と犬を本学に招待し、農学部体育館にて開催した(図4,5)。
- (4) 福祉施設の訪問
近隣の2ヶ所の福祉施設、社会福祉法人「多摩大和園さくら苑」と「多摩大和園やまと苑」を訪問し、動物介在活動を実施した。



図2. 府中市立新町小学校に本学教員と学生が出張して子どもたちからの質問に答えている。

府中第九小学校ふたば学級

2006. 7. 13



図3. 府中市立第九小学校ふたば学級の子どもたちが本学馬術施設や山羊施設で馬や山羊とふれあっている。アップルサイダー号も子どもを馬車に乗せて活躍している。

市民向け しつけ教室



図4. 犬のしつけサークルが主催した市民向け犬のしつけ教室には、多数の市民が愛犬と共に参加した。



図5. 犬のしつけサークル主催のワンワン学院で、本学学生がしつけのデモンストレーションを行っている。

8.3. 「ホースセラピー」コースの取組

- (1) 子どもを対象とした馬とのふれあい体験の開催
農工祭で、子どもに乗馬や馬車と馬とのふれあい体験を実施した。
- (2) ジャパンラグビートップリーグへの参加
東芝府中とサントリーからの依頼により、アップルサイダー号による子供達の馬とのふれあい活動とラグビーの試合球を運ぶイベントを企画実行した。当日の様子は、東京農工大学学報444号に掲載された。
- (3) 子供乗馬体験会の開催
近隣の子どもたちを招待して、本学馬術施設において乗馬体験会を開催した。
- (4) 府中市と協同参画事業「馬の教室」の開催
平成17年から開始した本学の社会貢献事業の一環であり、ケーブルテレビでも紹介され、市民に大変好評であったことから、平成18年度は参加人数が2倍となった。平成18年度馬の教室のカリキュラムを右に示した。当日の様子が朝日新聞（平成18年8月30日）に掲載された。「馬の教室」で実施した活動の一部を写真で示した（図6,7,8）。

平成18年度馬の教室カリキュラム

日時 第1回 平成18年8月28日(月)・8月29日(火)
第2回 平成18年8月30日(水)・8月31日(木)
午前7時30分～正午
場所 東京農工大学馬術施設

カリキュラム			
日付	時間	授業	内容
1日目	7:30	集合	
第1回 8月28日(月)	7:30～8:00	開会式	挨拶・田谷部長・橋本監督・竹部主幹 学生講師自己紹介 馬匹紹介 参加者自己紹介 カリキュラム・注意事項の説明
第2回 8月30日(木)	8:00～8:15	施設紹介	8:15に再集合
	8:15～8:30	着替え	8:30に再集合
	8:30～9:00	馬の扱い方	馬装も併せて行う
	9:00～9:15	準備運動	人・馬の準備運動
	9:15～9:30	馬の運動の紹介	馬術の基本・姿勢 駆足・連足・常足・横足など基本運動 の紹介(上級生騎乗) 障害飛越の実演
	9:30～10:15	騎乗(引き馬)	5班に分かれる
	10:15～10:45	馬房掃除	馬の1日の紹介 敷き藁など紹介
	10:45～11:30	騎乗(調馬乗)	停止・発進(5班に分かれる)
	11:30～12:00	飼料付け(餌)	
	12:00～13:00	馬に関する勉強	昼食を食べながらビデオを見る
2日目	7:30	集合	
第1回 8月29日(火)	7:30～8:00	馬房掃除	
第2回 8月31日(木)	8:00～8:30	馬装	実際の引き馬を体験
	8:30～9:30	騎乗(調馬乗)	軽速足まで(5班に分かれる)
	9:30～9:45	講評	
	9:45～10:45	騎乗(調馬乗)	軽速足まで(5班に分かれる)
	10:45～11:00	講評	
	11:00～11:30	馬の手入れ	5班に分かれる
	11:30～11:45	飼料付け(餌)	
	11:45～12:00	終了式	
	12:00～	保護者体験乗馬等	



図6. 平成18年度「馬の教室」で、馬術部員が乗馬を指導している。



図7. 平成18年度「馬の教室」で、参加した小学生が馬にニンジンを与えている。



図8. 農工祭で、アップルサイダー号が赤ちゃんといふれあっている。

8.4. 動物行動療法や動物介在活動に関するシンポジウムの開催

学生および一般市民を対象としたシンポジウム「体験！アニマルヒーリング—動物の不思議な癒しパワー」を開催した。講師として、犬の行動学、動物介在療法およびホースセラピー分野で活躍する3名の専門家（高倉はるか氏、柴内裕子氏、太田恵美子氏）を招待した。当日の様子は、読売新聞（平成18年1月26日）および東京農工大学学報第445号に掲載された。

9 おわりに

本稿では、現在獣医学科が企画している動物を用いる新しい授業について紹介した。本授業の構想は、これまでに行ってきたボランティア活動の実績を本学学生の教育に活用すると共に「大学」「学生」「地域社会」を結びつけ、本学の社会貢献にも役立てようとするものである。今回の提案は、動物を一つの切り口として本学学生の教育の更なる改善を目指したものである。

最近、馬術部を有する大学で体育の正課の1科目として「乗馬」を開講する大学が増えている。本学でも充分対応可能な試みである。いずれの大学もそれぞれの大学の有する資源や施設を縦横に活用してさまざまな角度から大学教育の質を上げることを目指している。そのような意味では、大型動物だけを考えてみても、東京にありながら乳牛、羊を飼育するFSセンター、獣医学科で飼育

する山羊、馬術部で繋留している馬など、本学にしかないさまざまな資源の大学教育や地域社会への活用が考えられる。本稿で紹介した新企画授業構想については、今後実施に向けて充分検討を重ね近い将来に正式科目としての開講を目指している。

注

- (1) 動物介在教育は、Animal assisted education(AAE)の訳であり、学校での動物飼育などを介して、子どもたちの道徳的、精神的および人格的な成長を助ける教育を意味する。世界各国で、動物との関わりが子どもたちや若者に良い影響をもたらすことが明らかになっている。日本でも近年、主に小学校での動物飼育が子どもの心の教育にプラスになっている事例が報告されている。2001年9月にリオデジャネイロで開催された「第9回人と動物の関係に関する国際会議」の総会で学校におけるペットに関する基本的ガイドライン「IAHAIOリオ宣言 動物介在教育実施ガイドライン」が採択された。
- (2) ホースセラピーという用語は、正確には「ホースアシステッドセラピー、Horse assisted therapy」のことを意味する和製英語である。日本語では、治療的乗馬と呼ばれ、障害を持つ人の生活の質を向上させるために行われる馬を用いたさまざまな活動を意味する。通常、①レクリエーションとしての乗馬、教育

- 的、心理的、身体的などの目的で治療環境の改善を図る、②乗馬矯正法 (remedial riding) ならびに作業療法士や理学療法士が指導にあたり、身体機能の障害を持つ患者の姿勢、平衡性、可動性や機能の改善およびリハビリテーションなどの治療を行う、③乗馬療法 (hippotherapy) の3つに区分される。
- (3) 動物介在活動は、Animal assisted activity (AAA)の訳であり、動物を伴って老人ホームなどの訪問活動に代表される活動である。動物と触れ合う事が目的であり、レクリエーション的要素が強い。活動に使用する動物は、健康が十分にチェックされ、かつ、しつけの行き届いた動物が用いられ、多くのボランティアの支援が必要である。
- (4) CAPP活動は、Companion animal partnership program (人と動物とのふれあい活動) の略である。社団法人日本動物病院福祉協会の会員獣医師とボランティアが中心となり、犬、猫、ウサギなどの健康で正しくしつけられた動物と共に日本国内の各種福祉施設を訪問し、ふれあいの場を設けるボランティア活動である。昭和61年から行われている。
- (5) 動物介在療法は、Animal assisted therapy (AAT)の訳であり、医療専門家が治療目的で行う活動である。よく訓練された健康な動物と多くのボランティアの参加が必要である。活動に当たっては、患者の選択、治療目標の設定、治療計画の作成と実施および治療効果の評価など医療専門家によって行われる。

参考文献

- 明見健治 (1997) 「乗馬セラピーの実践をめざして」『ホース・メイト』22号, 49-52頁.
- 川喜田健司・桑野素子・慶野裕美・慶野宏臣 (2001) 「障害者乗馬の顔の表情用いた評価法の基礎的検討」『ヒトと動物の関係学会誌』9号, 140-144頁.
- 慶野宏臣・川喜田健司・樹神敏春・慶野裕美 (2001) 「障害者乗馬においてその効果を明らかにするための身体機能評価基準(HEIP scale)の試作」『ヒトと動物の関係学会誌』9号, 134-139頁.
- 慶野裕美・慶野宏臣・原幸一・岸川正大・川喜田健司 (2002) 「乗馬することによる障害児の精神的変化をとらえる試み」『ヒトと動物の関係学会誌』10号, 71-75頁.
- 小林朋子・石上智美・徳田克己 (2002) 「知的障害者更正施設における動物飼育の実態とその意義についてⅡ—職員を対象とした調査結果を中心として—」『ヒトと動物の関係学会誌』11号, 64-69頁.
- 桜井富士朗・長田久雄編著 (2003) 『「人と動物の関係」の学び方—ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう』インターズー
- 篠崎宏司 (1999) 「馬が心の扉をノックする(1)不登校児と馬」『ホース・メイト』26号, 39-42頁.
- 柴内裕子 (1999) 「シルバー世代と動物—高齢者と動物の絆は21世紀の最重要課題」『リラティオ』4号, 47-49頁.
- 高野正博 (2003) 「動物介在療法が著効を呈した関節リウマチ患者の一症例」『ヒトと動物の関係学会誌』12号, 79-83頁.
- 竹内一男 (1999) 「動物が教えてくれる大切なこと—子どもの成長過程における動物の存在」『リラティオ』2号, 33-36頁.
- 谷田創・木場有紀 (2006) 「動物介在教育の実践—幼児を対象としたAAEを中心として—」『ヒトと動物の関係学会誌』17号, 28-34頁.
- 田谷与一 (2001) 「障害者乗馬を普及させるためには」『Hippophile』No.11, 20-27頁.
- 局博一 (2001) 「わが国の障害者乗馬研究の現状」『ヒトと動物の関係学会誌』9号, 76-81頁.
- 局博一 (2005) 「ホースアシステッドセラピー」『畜産の研究』第59巻第1号, 53-57頁.
- 中川亜耶人・中澤利美・小林香織・中川泰江・加藤康代 (2001) 「特別養護老人ホームにおけるAAA (アニマル・アシステッド・アクティビティ) 実施について—Ⅰ. 痴呆度別にみたAAA効果」『ヒトと動物の関係学会誌』9号, 130-133頁.
- 中川美穂子 (2001) 「残虐化する動物虐待と少年凶悪犯罪—学校飼育動物は、愛情と命を教える最高の教材」『リラティオ』8号, 44-47頁.
- 西村脩一 (1996) 「リハビリとミニチュアホース」『ホース・メイト』18号, 3-6頁.
- 日本動物病院福祉協会編 (1996) 『動物は身近なお医者さん—アニマル・セラピー』廣済堂出版
- 鳩貝太郎・中川美穂子編集 (2003) 教職研修総合特集』157 『学校飼育動物と生命尊重の指導—学校で動物を飼う意義と適切な管理について再考する』教育開発研究所
- 鳩貝太郎 (2006) 「子どもの教育における動物の役割」『ヒトと動物の関係学会誌』17号, 35-38頁.
- 早坂絵里・青山真人・杉田昭栄 (2000) 「小学校における飼育動物への教員と児童の意識」『ヒトと動物の関係学会誌』8号, 78-82頁.
- 林良博 (1999) 『検証アニマルセラピー—ペットで心とからだを癒せるか』講談社ブルーバックス
- 廣瀬由美・増澤康男 (2005) 「学校飼育動物を通して児童が学ぶもの—ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性—」『ヒトと動物の関係学会誌』15号,

- 84-88頁.
- 松井寛二・岡本敬子・竹田謙一 (2004) 「携帯型データロ
ガによる乗馬時のウマき甲部および騎乗者腰部におけ
る3軸方向の加速度と騎乗者の心拍数および呼吸数の
計測」『ヒトと動物の関係学会誌』13号, 105-109頁.
- 松浦晶央・滝田奈々・秦寛・近藤誠司 (2004) 「乗馬前後
のヒト心電図R-R間隔変動解析の試み」『ヒトと動物
の関係学会誌』14号, 32-36頁.
- 松上利男 (1996) 「自閉症とミニチュアホース」『ホー
ス・メイト』18号7-9頁.
- ヤスミンデブー・加隈良枝 (2006) 「効果的な動物福祉
教育は子どもの心と考え方を変える」『ヒトと動物の
関係学会誌』17号, 22-27頁.
- 山崎恵子訳 (1997) 『人と動物の関係学』インターズー
- 山崎恵子 (1998) 「もっと知りたいAAT—AATって何?そ
の根源にあるもの」『リラティオ』1号, 20-22頁.
- 山崎恵子 (2001) 「残虐化する動物虐待と少年凶悪犯罪
—動物虐待の“真”の意味を問う」『リラティオ』8
号, 28-33頁.
- 山崎恵子 (2001) 「日本におけるAATの今, そしてこれ
から—あいまいな日本の“アニマル・セラピー”」『リ
ラティオ』10号, 18-19頁.
- 横山章光 (1996) 『アニマル・セラピーとは何か』NHK
ブックス
- 横山章光 (2000) 「ペットへの対応が経過を左右した2症
例」『ヒトと動物の関係学会誌』8号, 84-86頁.
- 横山章光 (2006) 「動物介在教育(Animal Assisted
Education:AAE)の多面性」『ヒトと動物の関係学会誌』
17号, 20-21頁.